



TITLE:

# 接続問題 (複素領域における微分方程式)

AUTHOR(S):

河野, 實彦

---

CITATION:

河野, 實彦. 接続問題 (複素領域における微分方程式). 数理解析研究所講究録 1979, 351: 69-84

ISSUE DATE:

1979-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104384>

RIGHT:

## 接 続 問 題

広島大 理学部 河野實彦

### 1. 第 1 種 Airy 関数の拡張

$t=0$  に確定特異点,  $t=\infty$  には  $\text{rank } q$  の不確定特異点と 2 つの特異点をもつ線型微分方程式系

$$(1.1) \quad t \frac{dX}{dt} = (A_0 + A_1 t + \dots + A_q t^q) X$$

の解の大域的性質を規定する Stokes 係数を求める理論は、簡単に次のように述べることできる； $t=0$  における解の巾級数表現の係数  $G_j(m)$  は  $q$  階線型差分方程式系の特殊解であり、それをある適当に選んだ基本解  $F_{jl}^k(m)$  ( $k=1, 2, \dots, n$ ;  $l=1, 2, \dots, q$ ) によって

$$(1.2) \quad G_j(m) = \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^q \tau_{jl}^k F_{jl}^k(m)$$

と表わしたときの定数係数  $\tau_{jl}^k$  が求める Stokes 係数となる。

このことは、線型差分方程式の解の接続問題とも言えるが  $m$  は整数値をとるので、係数  $\tau_{jl}^k$  は定数として求めるのである。線型差分方程式論では、解は右または左半平面に於け

る  $m \rightarrow \infty$  のときの漸近挙動によって定められるのが一般的である。この事実を考慮すれば、定数  $\gamma_{jk}^k$  の explicit な値を求める方法として、(1.2) を連立方程式として解いて、右半平面上で  $m \rightarrow \infty$  とすれば良い。しかし、このためには  $G_j(m)$  の漸近挙動がわかっていなければならぬ。この終末条件による方法を用いて、Extended Airy equation

$$(1.3) \quad z^n y^{(n)} - z^q y = 0 \quad (q: \text{整数}, q \geq n)$$

の解の大域的性質を説明してみよう。

まず、(1.3) に変数変換  $z = t^n$  を施し、

$$y_1 = y, \quad y_p = \{\omega - n(n-p+1)\} \{\omega - n(n-p+2)\} \cdots \{\omega - n(n-1)\} y,$$

$$\omega = t \frac{d}{dt}, \quad (p=2, 3, \dots, n)$$

とおき、列ベクトル  $Y = (y_1, y_2, \dots, y_n)^T$  (\*は転置を表す)

に関する微分方程式系に書き直し、さらに、 $Y$  に shearing transformation  $X = S(t)Y$ ,  $S(t) = \text{diag}(t^{-q(n-1)}, t^{-q(n-2)}, \dots, t^{-q}, 1)$

を適用すると、次の微分方程式系が得られる。

$$(1.4) \quad t \frac{dX}{dt} = (A_0 + A_q t^q) X$$

$$A_0 = \begin{pmatrix} p_1 & & \\ & p_2 & \\ & & \ddots \\ & & & p_n \end{pmatrix} \quad p_j = (n-j)(n+q) \quad (j=1, 2, \dots, n),$$

$$A_q = \begin{pmatrix} 0 & 1 & & \\ & 0 & & \\ & & \ddots & \\ & & & 1 \\ n & 0 & \cdots & 0 \end{pmatrix}$$

この形にしてみると, (1.4) は確定特異点  $t=0$  にありて

$$(1.5) \quad X_j(t) = t^{p_j} \sum_{m=0}^{\infty} G_j(m) t^m \quad (j=1, 2, \dots, n)$$

なる収束巾級数表現の基本解をもつ, 不確定特異点  $t=\infty$  にありては

$$\left\{ \begin{aligned} X^k(t) &= \exp\left(\frac{\lambda_k}{q} t^q\right) t^{\mu_k} \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) t^{-s} \\ \lambda_k &= n \omega_n^{k-1} \quad (\omega_n = \exp(2\pi i/n)) \\ \mu_k &= (n+q)(n-1)/2, \quad H^k(0) = (1, \lambda_k, \dots, \lambda_k^{n-1})^* \\ &\quad (k=1, 2, \dots, n) \end{aligned} \right.$$

なる形式解をもつことは容易に判る。

(1.5) の係数  $G_j(m)$  は線型差分方程式系

$$(1.6) \quad \left\{ \begin{aligned} (m+p_j - A_0) G_j(m) &= A_q G_j(m-q), \\ G_j(0) &\neq 0, \quad G_j(x) = 0 \quad (x < 0) \quad (j=1, 2, \dots, n) \end{aligned} \right.$$

をみたす特殊解であり, 一方, 各  $j$  に対し

$$\left\{ \begin{aligned} F_{jl}^k(m) &= \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) g_{jl}^k(m+s), \\ g_{jl}^k(m) &= \frac{1}{q} \frac{\left\{ \left( \frac{\lambda_k}{q} \right)^{\frac{1}{q}} \omega_q^{-(l+1)} \right\}^{m+p_j-\mu_k}}{\Gamma\left(\frac{m+p_j-\mu_k}{q} + 1\right)} \end{aligned} \right.$$

$$(\omega_q = \exp(2\pi i/q); \quad k=1, 2, \dots, n; \quad l=1, 2, \dots, q)$$

は (1.6) の基本解をなすことが示される。その結果 (1.2) を得,

次の展開定理を証明することが出来る。

$$\begin{aligned} X_j(t) &= t^{p_j} \sum_{m=0}^{\infty} G_j(m) t^m \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \left( \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^q \rho_{jl}^k F_{jl}^k(m) \right) t^{m+p_j} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \sum_{m=0}^{\infty} \left( \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^q \Gamma_{jl}^k \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) g_{jl}^k(m+s) \right) t^{m+p_j} \\
&= \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^q \Gamma_{jl}^k \sum_{s=0}^{\infty} H^k(s) x_{jl}^k(t, s),
\end{aligned}$$

$$x_{jl}^k(t, s) = t^{p_j} \sum_{n=0}^{\infty} g_{jl}^k(m+s) t^n.$$

上で定義した関数  $x_{jl}^k(t, s)$  は 1 階の非斉次線型微分方程式の特殊解で、その大域的性質を通して  $X_j(t)$  の大域的性質が解明されるといえるのが我々の理論の骨子である。  $X_j(t)$  の大域的挙動は

$$\left\{ \begin{aligned} X_j(t) &\sim \sum_{k=1}^n \Gamma_{jl_k}^k X^k(t) \quad \text{as } t \rightarrow \infty \text{ in } S(l_1, l_2, \dots, l_n) = S_{l_1}(l_1) \\ &\quad \cap S_{l_2}(l_2) \cap \dots \cap S_{l_n}(l_n), \\ S_l(\lambda_k) &: -\frac{\pi}{q} + \frac{2\pi}{q} l \leq \arg \lambda_k^{\frac{1}{q}} t < -\frac{\pi}{q} + \frac{2\pi}{q} (l+1) \end{aligned} \right.$$

である。

そこで  $\Gamma_{jl}^k$  を求めよう。 (1.6) から  $G_j(m)$  の値は

$$\left\{ \begin{aligned} G_j((mn+j-1)q) &= (g^{(j,1)}(mn+j-1), 0, \dots, 0)^*, \\ g^{(j,1)}(mn+j-1) &= q^{-mn} \left[ \prod_{i=1}^m \Gamma(m+1 + \frac{i-j}{q}) \right]^{-1}, \\ G_j((mn+j-1)q+r) &= 0 \quad (r=1, 2, \dots, q-1) \end{aligned} \right.$$

( $j=1, 2, \dots, n$ )

であることがわかり、連立方程式

$$\begin{aligned} G_j((mn+j-1)q+r) &= \sum_{k=1}^n \sum_{l=1}^q \Gamma_{jl}^k F_{jl}^k((mn+j-1)q+r) \\ &\quad (r=0, 1, \dots, q-1) \end{aligned}$$

を  $\mathcal{P}_{jl}^k$  により表し、右半平面上で  $m \rightarrow \infty$  のとき

$$F_{jl}^k(m) \sim H^k(0) g_{jl}^k(m) \{1 + O(m^{-1})\},$$

$$\frac{g_{jl}^k(m+l)}{g_{jl}^k(m)} \sim \left\{ \left( \frac{\lambda_l}{q} \right)^{\frac{1}{q}} \omega_q^{-(l+1)} \right\}^2 m^{-\frac{r}{2}} \{1 + O(m^{-\frac{1}{q}})\},$$

$$\frac{g_{jl}^{(j,1)}(mn+j+1)}{g_{jl}^k((mn+j+1)q)} \sim \left\{ \frac{n}{(2\pi)^{n+1}} \right\}^{\frac{1}{2}} q^{j+\frac{r_1-\mu_k}{2}} \omega_q^{(l+1)(j_1-\mu_k)} \omega_n^{-(k+1)} \left\{ (j+1) + \frac{r_1-\mu_k}{2} \right\} \\ \times \{1 + O(m^{-1})\}$$

となることを考慮すれば、

$$(1.7) \quad \mathcal{P}_{jl}^k = \frac{q^{\frac{(n+q)(n+1)}{2q}}}{(2\pi)^{\frac{n+1}{2}} n^{\frac{1}{2}}} q^{-\frac{n}{2}(j+1)} \omega_q^{\{ (k+1)-n(l+1) \} \{ (j+1) + \frac{(n+q)(1-n)}{2n} \}}$$

$$(j, k=1, 2, \dots, n; l=1, 2, \dots, q)$$

が得られる。

以上の結果を Extended Airy equation (1.3) に戻って、定理の形に書いておく。

定理 1. Extended Airy equation (1.3) の基本解

$$(1.8) \quad y_j(z) = z^{n-j} \sum_{m=0}^{\infty} \left( \prod_{i=1}^n \Gamma(m+1 + \frac{i-j}{q}) \right)^{-1} (z^q q^{-n})^m \\ (j=1, 2, \dots, n)$$

の大域的挙動は

$$(1.9) \quad y_j(z) \sim \sum_{k=1}^n \mathcal{P}_{jk}^k y_k^k(z) \quad \text{as } z \rightarrow \infty \text{ in } S(l_1, l_2, \dots, l_n)$$

$$= S_{l_1}^1 \cap S_{l_2}^2 \cap \cdots \cap S_{l_n}^n$$

$$S_l^k : (2l-3)\pi - \frac{2\pi}{n}(k-1) \leq \arg z^{\frac{q}{n}} < (2l-1)\pi - \frac{2\pi}{n}(k-1)$$

である。ここで、 $y^k(z)$  ( $k=1, 2, \dots, n$ ) は

$$y^k(z) = \exp\left(\frac{n}{q} \omega_n^{k-1} z^{\frac{q}{n}}\right) z^{\frac{(n-q)(n+1)}{2n}} \sum_{s=0}^{\infty} h^k(s) z^{-\frac{q}{n}s}$$

$$(h^k(0)=1; k=1, 2, \dots, n)$$

と表わされる (1.3) の形式解であり、 $\lambda$  の係数  $\eta_{jl}^k$  は (1.7) で与えられたものである。但し、 $l$  はすべての整数値をとってよいことを注意しておく。

この結果は H.L. Pinnittin (1950), J. Heading (1959-1960), B.L.J. Braakema (1971) 等の結果よりは明解であると思ふが...

(1.3) において  $n=2$ ,  $q=3$  のときは、古典的な Airy equation である。基本解として、第1種、第2種の Airy 関数と呼ばれる  $A_1(z)$ ,  $B_1(z)$  なるものがとれ、その性質はよく知られるところである。 $n=2$ ,  $\forall q \geq 2$  のとき、C.A. Swanson & V.B. Headley: An extension of Airy's equation, SIAM J. Appl. Math., 15 (1967) 1400-1412 は modified Bessel function を用いて、 $A_1(z)$   $B_1(z)$  に対応する関数を定義し、その大域的性質、零点分布等を調べた。この線に沿って、我々は Extended Airy function of the first kind  $A_1(z)$  を定義し(勿論、 $n=2$  のときは、古典的  $A_1(z)$  であり、Swanson & Headley による定義のものである)。

その諸々の性質を調べることにしよう。

$A_i(z)$  は (1.3) を満たす整関数解であり,  $\arg z = 0$  上で "principally recessive" な解として定義する。一意的に定まるためには  $n = 2N$  ( $N$ : 整数,  $N \geq 1$ ) となければならぬ。

定理 1 の結果より

$$(1.10) \quad A_i(z) = \sum_{j=1}^n c_j y_j(z) \sim \sum_{k=1}^n \left( \sum_{j=1}^n c_j P_{j, l_k}^k \right) y^k(z) \\ \text{as } z \rightarrow \infty \text{ in } S'(l_1, l_2, \dots, l_n)$$

を得るが,  $\arg z = 0$  は  $l_k = 1$  ( $k=1, 2, \dots, N$ )  $l_k = 2$  ( $k=N+1, N+2, \dots, n$ ) に対応する sector  $S'(1, \dots, 1, 2, \dots, 2)$ :  $0 \leq \arg z^{\frac{k}{n}} < \frac{\pi}{N}$  に含まれ, 形式解  $y^k(z)$  ( $k=1, 2, \dots, n$ ) の中で,  $y^{N+1}(z)$  が  $\arg z = 0$  上で最も弱い growth order をもつものであるから,  $c_j$  としては, 連立方程式

$$\begin{cases} \sum_{j=1}^n c_j P_{j, l_k}^k = \delta_{k, N+1} & (k=1, 2, \dots, n), \\ \delta_{ij} & \text{Kronecker の } \delta, \\ l_k = \begin{cases} 1 & k=1, 2, \dots, N \\ 2 & k=N+1, N+2, \dots, n \end{cases} \end{cases}$$

を解くことにより求められる。このことから, Extended

Airy function of the first kind  $A_i(z)$  は次のように定義される

$$(1.11) \quad A_i(z) = D \sum_{j=1}^n (-1)^j q^{\frac{n}{2}(j-1)} P_{mj}(\omega_q^{-N+1}, \dots, 1, \dots, \omega_q^{N-1}) y_j(z),$$



$$D = \left(\frac{\pi}{2}\right)^{\frac{n-1}{2}} \frac{n^{\frac{1}{2}} q^{\frac{(n+2)(1-n)}{2q}}}{\prod_{i=1}^n \sin\left(\frac{\pi}{q} \lambda_i\right)}$$

ここで,  $P_{nj}(\omega_q^{-N+1}, \dots, 1, \dots, \omega_q^{N-1})$  は  $\omega_q^{-N+1}, \omega_q^{-N+2}, \dots, 1, \dots, \omega_q^{N-1}$  の  $(n-j)$  次の基本対称関数で, 実数値であり, また

$$(1.12) \quad P_{nj}(\omega_q^{-N+1}, \dots, 1, \dots, \omega_q^{N-1}) = P_{j-1}(\omega_q^{-N+1}, \dots, 1, \dots, \omega_q^{N-1})$$

$$(j=1, 2, \dots, N)$$

なる対称関係をみたしている。

注意  $n=2$  のときの定義に従えば, (1.11) において定数  $D$  は除き, それは  $A_i(z)$  の Stokes 係数に組み込むべきであろうが, 後の計算の都合上このままにしておく。

次に,  $A_i(z)$  の性質を調べよう。

### 線形従属関係式

$k_j (j=1, 2, \dots, n)$  を modulo  $q$  で互いに相異なる整数とするとき,  $A_i(\omega_q^{k_j} z) (j=1, 2, \dots, n)$  の Wronskian は

$$W[A_i(\omega_q^{k_1} z), A_i(\omega_q^{k_2} z), \dots, A_i(\omega_q^{k_n} z); z]$$

$$= c_1 c_2 \cdots c_n \prod_{1 \leq i < j \leq n} \sin\left|\frac{k_j - k_i}{q} \pi\right| \exp\left\{\left(\frac{k_j + k_i}{q} + \frac{1}{2}\right) \pi i\right\}$$

$c_1, c_2, \dots, c_n$  は (1.10) の係数,

となる。即ち,  $A_i(\omega_q^{k_j} z) (j=1, 2, \dots, n)$  は (1.3) の基本解をな

す。例えは、 $k_j = 0 \pmod{q}$  なさば

$$A_i(z) = \sum_{j=1}^n d_j A_i(\omega_q^{k_j} z)$$

$$d_j = \frac{\prod_{i=1}^n (\omega_q^{k_i} - 1)}{\prod_{i=1}^n (\omega_q^{k_i} - \omega_q^{k_j})} \quad \left( \prod' \text{は } j \text{ に対応する項を除いたものの積} \right)$$

( $j=1, 2, \dots, n$ )

なる関係式が成り立つ。古典的  $A_i(z)$  の

$$A_i(z) + \omega A_i(\omega z) + \omega^2 A_i(\omega^2 z) = 0, \quad \omega = \exp(2\pi i/3)$$

に対応するものである。

### $A_i(z)$ の大域的挙動

大域的挙動を知るためには、関係式 (1.10) の右辺の係数を計算すれば良い。

定理 2.  $q = \mu n + r \geq n$  ( $\mu \geq 1, 0 \leq r < n$ ) とし、

$$d_k = \exp \left[ \frac{(n+1)k}{n} \pi i \right] \frac{\prod_{j=1}^{2N-1} \sin \left| \frac{j+k}{q} \pi \right|}{\prod_{j=1}^{2N-1} \sin \left| \frac{j}{q} \pi \right|} \quad (k=0, 1, \dots)$$

とおく。そのとき、複素平面  $0 \leq \arg z < 2\pi$  において、

$$\begin{aligned} A_i(z) \sim & d_{pn} y^{N+1}(z) + d_{p+1n} y^N(z) + \dots + d_{p+n} y^{N-r}(z) \\ & + d_{(p+1)n+1} y^{N-r}(z) + d_{(p+1)n+2} y^{N-r-1} + \dots + d_{(p+1)n+n} y^{N+2}(z) \end{aligned}$$

as  $z \rightarrow \infty$  in

$$\mathcal{S}_{p+n} : \left(2p + \frac{r}{N}\right) \pi \leq \arg z \frac{q}{n} < \left(2p + \frac{r+1}{N}\right) \pi$$

$$(p=0, 1, \dots, \mu; r=0, 1, \dots, 2N-1; pn+r < q)$$

が成り立つ。上式右辺の形式解の添字  $N-r$  は、 $\hat{r} = N-r$

(mod  $2N$ ) ( $1 \leq \hat{r} \leq 2N$ ) なる整数とみなす. Stokes 係数  $d_k$  は  $d_{-k} = 0$  ( $k > 0$ ) であり,  $d_{(\mu+1)n+r+1} = d_{(\mu+1)n+r+2} = \dots = d_{\mu n+r+1} = 0$  である. また,  $-2\pi \leq \arg z < 0$  において,

$$A_i(z) \sim \bar{d}_{pn} y^{N+1}(z) + \bar{d}_{p n+1} y^{N+2}(z) + \dots + \bar{d}_{p n+r} y^{N+1+r}(z) \\ + \bar{d}_{(p+1)n+r+1} y^{N+r+2}(z) + \bar{d}_{(p+1)n+r+2} y^{N+r+3}(z) + \dots + \bar{d}_{(p+1)n+1} y^N(z) \\ \text{as } z \rightarrow \infty \text{ in}$$

$$S_{-(pn+r)} : -(2p + \frac{r+1}{N})\pi \leq \arg z^{\frac{r}{N}} < -(2p + \frac{r}{N})\pi$$

$$(p=0, 1, \dots, \mu; r=0, 1, \dots, 2N-1; pn+r < q)$$

が成り立つ. さらに, Riemann 面上での挙動は, 上の関係式において,  $p$  に任意の正の整数値,  $r$  に  $0$  から  $2N-1$  の値をとらせればよい.

この定理により,  $A_i(z)$  の Stokes 現象は直ちに説明される. 複素平面上  $0 \leq \arg z < 2\pi$  では,  $\arg z^{\frac{r}{N}} = \theta$  とおき,

$$\theta_k = \frac{\pi}{2N} + \frac{\pi}{N} k \quad (k=0, 1, \dots, q-1)$$

とすると,

$$\left\{ \begin{array}{ll} A_i(z) \sim y^{N+1}(z) & (0 \leq \theta < \theta_N) \\ A_i(z) \sim d_{k+N} y^{n-k}(z) & (\theta_k \leq \theta < \theta_{k+1}) \\ & (k=N, N+1, \dots, q-N-2) \\ A_i(z) \sim d_{q-N} y^{N-q+1}(z) & (\theta_{q-N-1} \leq \theta < \frac{q}{N}\pi) \end{array} \right.$$

となる.  $\arg z = \frac{\pi}{q} \theta_k = \frac{\pi}{q} (2k+1)$  ( $k=N, N+1, \dots, q-N-1$ ) が  $A_i(z)$  の真の Stokes line である.

### $A_i(z)$ の零点分布

古典的  $A_i(z)$  が とうであるように, Stokes 現象の起きるところに零点は分布する.

定理 3.  $m_0$  は十分大きい正の整数とする.  $m_0$  より大きい任意の整数  $m$  に対して,

$$\rho = \left\{ \frac{m + \left(\frac{n-1}{2n}\right)\pi}{\frac{n}{2} \sin\left(\frac{\pi}{n}\right)} \right\}^{\frac{n}{2}}$$

とすれば, 各 Stokes line  $\arg z = \frac{\pi}{2}(2k+1)$  ( $k=N, N+1, \dots, q-N+1$ ) 上の  $|z| < \rho$  なる部分に, 丁度  $m$  の  $A_i(z)$  の零点が分布する.

### Lommel の方法

複素振動論において, リウマン Green の公式を用いる Lommel の方法は, 2 階線型微分方程式をみたす解の振動を調べる際には非常に有効である. しかし,  $2N$  階線型微分方程式に対しては, その方法は  $N$ -零点分布を調べることになる.

$a = re^{i\theta}$  ( $\theta \neq p\pi, p \in \mathbb{Z}$ ) を  $A_i(z)$  の  $N$ -零点とする. 即ち,

$$A_i(a) = A_i'(a) = \dots = A_i^{(N-1)}(a) = 0 \quad \text{とする.}$$

$A_i(z)$  の定義式 (1.11) の係数はすべて実数であるから,  $\overline{A_i(z)} = A_i(\bar{z})$  が成り立ち,  $\bar{a}$  もまた  $A_i(z)$  の  $N$ -零点であることがわかる. この事実と Green の公式とから,

$$\begin{aligned}
 (1.13) \quad & \sin q\theta \int_0^1 x^{q-2} |A_i(ax)|^2 dx \\
 &= (-1) \sin(n-1)\theta \cdot x^{n+q} A_i^{(n-1)}(0) A_i'(0) \\
 &+ (-1)^2 \sin(n-3)\theta \cdot x^{n+q} A_i^{(n-2)}(0) A_i''(0) \\
 &+ \vdots \\
 &+ (-1)^N \sin \theta \cdot x^{n+q} A_i^{(N)}(0) A_i^{(N-1)}(0),
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 (1.14) \quad & \sin q\theta \int_0^1 |A_i^{(N)}(ax)|^2 dx \\
 &= (-1) \sin(q-1)\theta \cdot x^{-1} A_i^{(N)}(0) A_i^{(N-1)}(0) \\
 &+ (-1)^2 \sin(q-3)\theta \cdot x^{-1} A_i^{(N+1)}(0) A_i^{(N-2)}(0) \\
 &+ \vdots \\
 &+ (-1)^N \sin(q-n+1)\theta \cdot x^{-1} A_i^{(n+1)}(0) A_i(0)
 \end{aligned}$$

を得る。これらの等式のどちらか一方でも成り立たなければ、  
 ときには  $A_i(z)$  の  $N$ -重点は分布しない ( $N$ -重点の分布しない  
 ことを  $N$ -zero-free domain とする)。ところで、 $N$ -重点  
 が存在すれば、当然 Stokes line 上に分布しているはずである。  
 その上では、(1.13-14) の左辺は 0 となり、また、先に注意  
 した係数の対称関係式 (1.12) を考慮すれば、

$$A_i^{(j-1)}(0) A_i^{(n-j)}(0) < 0 \quad (j=1, 2, \dots, N)$$

であることを知るのぞ、

$$\{ (-1) \sin(n-1)\theta, (-1)^2 \sin(n-3)\theta, \dots, (-1)^N \sin \theta \}$$

が

$$\{ (-1) \sin(q-1)\theta, (-1)^2 \sin(q-3)\theta, \dots, (-1)^N \sin(q-n+1)\theta \}$$

が同符号 ( $\geq 0$ ) となる Stokes line 上には  $N$ -零点は分布して

ないことになる。例えは",  $n=4$ ,  $q=8$  の場合, Stokes line は

$$\arg z = (5/8)\pi, (7/8)\pi, (9/8)\pi, (11/8)\pi \text{ であるが, } \arg z =$$

$(5/8)\pi, (11/8)\pi$  上には  $A_1(z)$  の 2-零点は分布してない

結論される。

## 2. 多点接続問題

線型微分方程式系

$$(2.1) \quad \frac{dX}{dt} = \left( \frac{A_0}{t} + \frac{A_1}{t-1} + A_2 \right) X$$

の接続問題を考察しよう。  $t=0, 1$  は確定特異点で,  $z=\infty$  での

特性定数を  $\alpha_j, \beta_j$  ( $j=1, 2, \dots, n$ ) とする。  $\alpha_j, \beta_j$  はそれぞれ

$A_0, A_1$  の固有値である。  $t=\infty$  は rank 1 の不確定特異点

で,  $z=\infty$  の特性定数を  $\lambda_k, \mu_k$  ( $k=1, 2, \dots, n$ ) とする。

$\lambda_i \neq \lambda_j$  ( $i \neq j$ ) と仮定すれば, (2.1) で最初から,  $A_2 = \text{diag}(\lambda_1,$

$\lambda_2, \dots, \lambda_n)$  であるとしてもよい。 特性定数の間に常に一

つ存在する不変式, いわゆる Fuchs の関係式は

$$\sum_{j=1}^n \alpha_j + \sum_{j=1}^n \beta_j = 2 \sum_{k=1}^n \mu_k + n$$

である。

さて, (2.1) の接続問題を解くには, 次のような reduction  
を行ふのがよい.  $\varphi = t(t+1)$  とおくと, (2.1) は

$$\begin{aligned} \varphi X' &= \left\{ A_2 \varphi + \left( \frac{A_1 + A_0}{2} \right) \varphi' + \left( \frac{A_1 - A_0}{2} \right) \right\} X \quad ( ' = \frac{d}{dt} ) \\ &= \{ A \varphi + B \varphi' + C \} X \end{aligned}$$

と書き直すことができる. さて,  $t=0, 1$  の近傍では

$$(2.2) \quad \begin{cases} X(t) = X_1(\varphi) + \varphi' X_2(\varphi) \\ X_i(\varphi) = \varphi^j \sum_{m=0}^{\infty} G_i(m) \varphi^m \quad (i=1, 2; j=\alpha_j \text{ or } \beta_j) \end{cases}$$

なる収束巾級数で表現される解をとり,  $t=\infty$  の近傍にあって  
は, 形式解を

$$(2.3) \quad \begin{cases} Y^k(t) = e^{\lambda_k t} \{ Y_1^k(\varphi) + \varphi' Y_2^k(\varphi) \} \\ Y_i^k(\varphi) = \sum_{s=0}^{\infty} H_i^k(s) \varphi^{-s+\mu_k} \quad (i=1, 2) \\ (k=1, 2, \dots, n) \end{cases}$$

と表現するにとりうる.

$X_i(\varphi)$  ( $i=1, 2$ ) は微分方程式系

$$(2.4) \quad \begin{cases} \varphi \frac{d}{d\varphi} X_1 = B X_1 + (A\varphi + C) X_2 \\ (1+4\varphi) \varphi \frac{d}{d\varphi} X_2 = (A\varphi + C) X_1 + (B(1+4\varphi) - 2\varphi) X_2 \end{cases}$$

をみたす.  $\varphi = -1/4$  は見掛けの特異点である.

(2.2) を (2.4) に代入してみるとわかるが, 係数  $G_i(m)$  は, 差  
分方程式系

$$(2.5) \quad \begin{cases} \begin{pmatrix} m+f-B & -C \\ -C & m+f-B \end{pmatrix} \begin{pmatrix} G_1(m) \\ G_2(m) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & A \\ A & 4(B-(m+f))-2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} G_1(m-1) \\ G_2(m-1) \end{pmatrix} \\ (G_1(0), G_2(0))_* \neq 0, (G_1(x), G_2(x))_* = 0 \quad (x < 0) \end{cases}$$

の特解である。同様にして、形式解 (2.3) の係数  $H_i^k(s)$  は  
 差分方程式系

$$(2.6) \quad \begin{cases} \begin{pmatrix} 0 & \lambda_k - A \\ \lambda_k - A & 4(\mu_k - s - 1 - B) + 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} H_1^k(s+1) \\ H_2^k(s+1) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} B - \mu_k + s & C \\ C & B - \mu_k + s \end{pmatrix} \begin{pmatrix} H_1^k(s) \\ H_2^k(s) \end{pmatrix} \\ (H_1^k(0), H_2^k(0))_* \neq 0, (H_1^k(x), H_2^k(x))_* \neq 0 \quad (x < 0) \end{cases}$$

をみたす特解であることも知る。

§1 で述べたと同様の、 $X(t)$  の展開式を得るために

$$\begin{aligned} \varphi X'(t, s) &= (\lambda_k \varphi + (\mu_k - s) \varphi') X(t, s) \\ &\quad + \left\{ (s + f - \mu_k) g_2^{kl}(s) + \lambda_k g_2^{kl}(s-1) \varphi' \right\} \varphi^f \end{aligned}$$

の解として定義される基本関数を導入する。その関数は

$$\begin{cases} x^{kl}(t, s) = x_1^{kl}(\varphi, s) + \varphi' x_2^{kl}(\varphi, s) & (l=1, 2) \\ x_i^{kl}(\varphi, s) = \sum_{m=0}^{\infty} g_i^{kl}(m+s) \varphi^{m+f} & (i=1, 2) \end{cases}$$

と表わされるもので、その巾級数表現の係数  $g_i^{kl}(m)$  ( $i, l=1, 2$ ) は超幾何差分方程式

$$(2.7) \quad \begin{cases} (m+f-\mu_k) g_1^{kl}(m) = \lambda_k g_2^{kl}(m-1) \\ (m+f-\mu_k) g_2^{kl}(m) = \lambda_k g_1^{kl}(m-1) + \{4(\mu_k-f-m)+2\} g_2^{kl}(m-1) \end{cases}$$

をみたす基本解である。しかし、ここでは紙数の都合で詳しく



く述べられるが、 $g_{\lambda}^{kl}(m)$  は基本関数の大域的性質との関連から適当に選ばれてしまった関数である ( $l$  は sector  $\lambda$  の依存を示す添字)。そこで、

$$F_{\lambda j}^{kl}(m) = \sum_{s=0}^{\infty} H_{\lambda}^k(s) g_{j'}^{kl}(m+s) \quad (i, j=1, 2)$$

が well-defined であることを証明すれば、(2.6)(2.7) とから

$$\begin{cases} \hat{F}_1^{kl}(m) = F_{11}^{kl}(m) + F_{22}^{kl}(m) + 4 F_{22}^{kl}(m-1) \\ \hat{F}_2^{kl}(m) = F_{12}^{kl}(m) + F_{21}^{kl}(m) \end{cases}$$

は (2.5) の基本解をなすことが容易に示される。このことから

$$\begin{cases} G_1(m) = \sum_{k=1}^m \sum_{l=1}^2 \pi^{kl} \hat{F}_1^{kl}(m) \\ G_2(m) = \sum_{k=1}^m \sum_{l=1}^2 \pi^{kl} \hat{F}_2^{kl}(m) \end{cases}$$

によつて、Stokes 係数  $\pi^{kl}$  ( $k=1, 2, \dots, m; l=1, 2$ ) を決定し、 $X(t)$  を基本関数列  $\{x^{kl}(t, s)\}$  によつて次のように展開することが出来る。

$$\begin{aligned} X(t) &= X_1(\varphi) + \varphi' X_2(\varphi) \\ &= \sum_{k=1}^m \sum_{l=1}^2 \pi^{kl} \left( \sum_{s=0}^{\infty} H_1^k(s) x^{kl}(t, s) + \varphi' \sum_{s=0}^{\infty} H_2^k(s) x^{kl}(t, s) \right) \end{aligned}$$

として、 $x^{kl}(t, s)$  の大域的性質より  $X(t)$  のそれが解明される訳である。上の方法は、確定特異点の数、不確定特異点の rank が増してもよいと思う。